

# 季節を題材とした保育活動とその音楽指導方法

肝 付 文 子

## Improving Musical Techniques during Childcare for Enhancing Childrens' Appreciation of Seasons

*KIMOTSUKI Fumiko*

### はじめに

日本の保育園や幼稚園において、「季節」や「年中行事」を題材とした保育・教育活動は、非常に大きな役割を担っている。この活動は、日々の生活の中で自然と触れ合うものであるため、保育や幼児教育の現場では非常に重要視されている。

生後、就学までに子供達を取り巻く環境は、主に家庭を中心としたものであり、その周辺で見聞きする全てが、子供の成長の基盤となる。その中で、天候や気候に関する話は日々に耳にし、日常化する。そして、実際に空気が肌に触れる感覚や、身近な風景の小さな変化から、季節への意識はさらに深まっていく。また、季節によって、周囲の大人達が行事を行えば、子供達の季節への意識は自然な形で拡大し続けていく。大人にとっては、狭く、単調な子供の世界だが、季節やその変化、それに伴う年中行事という存在は、子供達にとっては刺激に満ちた新世界の広がりであり、五感を健やかに成長させるものである。

これらの内容は、音楽とも密接な関係がある。日本には、季節や年中行事を題材とした楽曲が多く存在し、園での活動にも多いに活用されている。楽曲の旋律や歌詞を通して、わかりやすく子供達に内容を伝え、音楽が、季節や行事を楽しく受け入れる大きな助けとなる。それに伴い、刻一刻と変化する「季節」や「年中行事」に関する数多く

の楽曲を、保育者は、歌や合奏で指導しなければならず、保育者自身の音楽的な知識や、楽器演奏の技術が、強く求められる。音楽の専門家でない保育者が、数多くの楽曲をどのような方法で学ぶことが、園での活動において最も有効であるかを、ここでは深く考察していく。

### I 季節に関する文化の考察

#### 1. 欧州諸国との比較

季節や年中行事に対して高い意識を持ち、自然現象へ敬意を表する文化は、日本古来の起源もある日本独特の観念である。それは、カレンダー上の祝祭日の状況からもわかる。まずは、祝祭日の日数と内容について、日本と欧州諸国のものとの比較してみよう。その様子は、表1の通りである。比較例としてここで取り上げる国は、欧州4カ国（イタリア、イギリス、フランス、ドイツ）とする。

表1の通り、「季節に関する祝祭日」という項目に着目すると、日本の5日に対し、どの国も少ないことがわかる。イタリア、フランス、ドイツにおいては、季節に関わる祝祭日は新年の祝い（New Year's Day）のみである。イギリスにおいては、新年を祝う2日間に加え、春の祝日と夏の祝日が存在するが、これは季節に由来するものではなく、商業的な意味合いで設定されている。一方、日本において、季節に関する判断できる祝

(表1) 祝祭日の日数と分類

	イタリア	イギリス	フランス	ドイツ	日本
年間総日数	11	8	15	19	14
宗教に関連する祝祭日	7	3	10	15	0
季節に関連する祝祭日	1	2	1	1	5
国家に関連する祝祭日	3	3	4	2	9

イギリス=イングランド・ウェールズ

祭日は5日ある。元旦は世界共通の新年の祝いの日であるが、その他、春分の日、秋分の日、子供の日など、季節の節目を祝祭日としている。また、それ以外にも、ヨーロッパ諸国で見ることができなかった「節句」の存在が際立つ。五節句（人日・上巳・端午・七夕・重陽）は、季節の節目とされ、その日に伝統的な年中行事を行う風習がある。もともと日本の土地に存在した土着の風習と、中国大陸から伝わった暦の文化が合わさって誕生し、時代とともに少しずつ変化を遂げ、現在に至っている。

このように、外国と比較しても、日本には季節の節目に行く独自の年中行事が存在することがわかる。季節の節目となる各時期に行く年中行事に加え、さらに四季そのものをめでる行事（花見、紅葉狩りなど）も含めて考えると、季節=自然と共存してきた日本人の長い歴史を垣間見ることができる。日本独特の文化である、季節の節目に行われる行事や季節そのものへの意識は、日本人がもつ独特で繊細な感性をも生み出し、世代を超えて脈々と現代まで受け継がれてきている。まさに「心」という目に見えない文化にまで発展・浸透してきた大きな財産といえる。そして、それらを通じた「しつけ」「生活」「教育」こそが、長い歴史の中で、日本の子供達の成長の基礎となってきたと思われる。

## 2. 日本の保育園・幼稚園における年中行事の活動

次に、子供達にとって家庭から一步離れた社会生活の代表である保育・教育機関において、それらに関連する行事がどのように実施されているのか、改めて考察してみたい。

園での季節に関わる行事や活動を、ここでは大

きく4つのタイプに分類する。

1. 四季の移り変わりにしたがって行われる伝統的な年中行事
  2. 季節そのものを感じる活動
  3. 教育・保育機関ならではの行事
  4. 外国の影響によって受け取り入れられた行事
- 上の1～4の項目について、実際に園で一般的に実施される活動内容の例を挙げ、全体的な活動の傾向をみていく。

上に分類した行事や活動は、生活の中の「自然」「慣習」「伝統」「宗教観」を明確に伝えるものである。項目1、3、4の行事には、行事の「起源」や「意味」が存在する。項目2の「季節そのものを感じる活動」には、自然を愛でる感性や文化を持つ日本人の長い歴史が背景にある。それら深い意味を持つ全てを伝え、実践することで、日々の生活を取り巻く環境についての正しい知識や歴史（つながり）を知ることができる。

そして、これらの行事や活動は、地方や国、地域において、共通のものと独自のものが存在するため、それらに触れ、学び、実践していくことで、自分の生まれ育った土地を知ると同時に、他の国や地域が存在すること、また自分は知らないその土地で生きる人が存在することを知らずともなる。さらにそこから、生まれ育った土地への愛着、故郷という概念の芽生え、さらには祖国への愛着（愛国心）という大きなテーマにまで心を動かし、情緒を深く育てていく可能性も秘めている。

## 3. 季節に関わる行事や活動に付随する音楽

次に、園における季節に関わる行事や活動と、音楽との関わりを考察したい。これまでに述べた

(表2)

< 1. 季節の移り変わりにしたがって行われる伝統的な年中行事 >

節分	お面を作り、実際に豆まきを実施し、福を願う。「豆まき」の歌などを歌う。
上巳の節句	「ひなまつり」の歌を歌ったり、合奏したりする。工作として紙でひな人形や壁掛けを制作し、園内に展示する。
端午の節句	「こいのぼり」の歌を歌ったり、合奏したりする。工作として紙でこいのぼりや兜を制作して展示などを行う。
七夕	子供達が願い事を書いた短冊や色紙をつるした七夕飾り（笹飾り）を作る。「たなばたさま」の歌を歌ったり、合奏したりする。
十五夜	お月見の行事として、紙や粘土、泥を使って団子を作り、ススキとともに園に飾る。「十五夜お月さん」や「月」といった曲を歌う。

< 2. 季節そのものを感じる活動 >

春	お花見	いずれの活動も室内を飛び出し、園庭や園外において、実際に自然と触れ合いながら、季節を感じる自然体験を行う。また、その季節を歌った歌に触れ、みんなで歌ったり、自然の中にある材料で工作を行ったりしながら、さらに季節や自然に親しむ。
夏	水遊び	
秋	紅葉狩り	
冬	雪遊び	

< 3. 教育・保育機関ならではの行事 >

春の行事	入園式 母の日 遠足	儀式、園外活動、体育活動などの活動が行われるが、全てに共通していることは、一般的にこれら項目に関する楽曲（歌や合奏用の楽曲）を学び、練習、発表をする。
夏の行事	夕涼み会	
秋の行事	いもほり 運動会 遠足	
冬の行事	正月 卒園式	

< 4. 外国の影響によって取り入れられた行事 >

ハロウィン	10 / 31 に、北アメリカやオーストラリアの一部などで行われるお祭り。ケルト人の土着信仰とキリスト教文化の諸事情が複雑に絡み合い、正確な由来はわかっていない。園では、かぼちゃを工作で制作したり、「トリック オア トリート」といって配布されるお菓子をもらう行為を再現したりする。
クリスマス	イエスキリスト生誕の日とされ、キリスト教を信仰する全ての国や地域、信徒によってお祭りが行われる。日本では大衆文化として取り入れられている。園では、クリスマス会の開催やクリスマスツリーの飾りつけ、サンタクロースのプレゼント配布などの行事が行われる。クリスマスの歌を合唱で歌ったり、合奏したりする。

とおり、季節に関わる年中行事や活動は、日本独自のものであり、季節や自然に感じ入る日本人の感性そのものが、日本文化の一つであるといえる。だからこそ、日々繰り返されるこれらの活動が、表面的な内容で終わってしまってはならない。

しかし、「音楽」という側面から考えると、そこには現実的な問題が存在する。それは、一言で言うと「保育者の楽器演奏能力」という問題である。

表2で1～4の項目に分類した園での実施内容

例にも記したとおり、季節に関わる行事や活動においては、それに付随する音楽活動が不可欠になってくる。そして、歌や合奏の指導において、保育者が使用する楽器は、やはりピアノ、オルガンといった鍵盤楽器が主である。CDなど既製の音源を利用する場合もあるが、日々の園での活動においては、保育者が簡単にふたを開けさえすれば音を鳴らすことができる鍵盤楽器は、最も活動にふさわしいとされ、一般的に活用されている。

しかし、保育や教育の中で非常に重要な題材で

ある季節や行事を子供達に指導していく上で、音楽は大変大きな役割を担う存在でありながら、音楽家ではない保育者が、日々、多数の楽曲を的確に操らなければならないという現実には、何か大きな矛盾さえ感じざるを得ない。現場によっては、保育者の楽器演奏の得手不得手によって役割分担が潤滑に行われているケースもあるようだが、その内容の豊富さ、数の多さから、保育者全員で担当していかなければ、日々の活動に支障をきたすというケースが圧倒的に多いだろう。楽曲数が少なければ、保育勤務時間以外に練習を重ね、園での活動に活かせるところである。しかし、次々に日々変化する行事や活動にあわせてこなさなければならぬ楽曲数が増えると、音楽の専門家でない保育者が、日々の過密な勤務の中で、楽器演奏の練習に特別に時間を割き、習得するのは大変厳しい。

ここではまず、園における多くの音楽活動の中でも、季節や年中行事に関する楽曲に焦点を絞り、園での音楽活動において頻繁に使用される代

表的な楽曲を、表2の1から4の項目に分類して挙げて、演奏技術の側面から具体的な問題点を明らかにしていきたい。

保育園や幼稚園において、頻繁に使用される季節や年中行事に関する楽曲数は、一部例として表3に挙げただけで38にのぼる。これらの楽曲に加え、挨拶の歌・かたづけの歌・歯磨きの歌などといった生活を題材とした楽曲や、季節とは関連しない題材の楽曲を含めてみても、園での音楽活動は幅広く、曲数が多いことが推察できる。その上、日々想定外の行動を起こし、マニュアルどおりにいくとは限らない子供達に対し、常に臨機応変に対応する柔軟性も必要であるとすれば、時には即興演奏の要素までも要求されるのではないかと思われる。実際に、子供達がより歌いやすい音域でピアノ伴奏するため、もしくは保育者の歌唱音域に合わせるため、楽譜をもとにその場で移調しなければならない場面に遭遇する、というケースもあるだろう。しかし、音楽の専門家でない保育者の場合、楽譜上で習得した楽曲演奏しかでき

(表3) 代表的な楽曲例

1. 季節そのものを感じる活動における楽曲

春	『春よこい』『はるがきた』『どこかで春が』『春の小川』
梅雨	『あめふり』『あめふりくまのこ』『雨』
夏	『夏は来ぬ』『うみ』『われは海の子』
秋	『とんぼのめがね』『あかとんぼ』『どんぐりころころ』『まつぼっくり』『虫の声』『里の秋』『紅葉』『小さい秋みつけた』『まっかな秋』
冬	『雪』『たき火』

2. 年中行事に伴う楽曲

正月	『お正月』	節分	『豆まき』
桃の節句	『うれしいひなまつり』	端午の節句	『こいのぼり』『せいくらべ』
七夕	『七夕さま』	クリスマス	『ジングルベル』『あわてんぼうのサンタクロース』

3. 保育・教育機関ならではの行事に伴う楽曲

入園式	『あくしゅでこんにちは』	母の日	『おかあさん』
父の日	『おとうさん』	運動会	『うんどうかい』
遠足	『おべんとうばこ』『くつがなる』	卒園式	『一年生になったら』
いもほり	『やきいもゲーチーパー』『いもほりの歌』		

ないことが一般的であり、瞬時の移調演奏などは非常に困難である。例として上に挙げた38の楽曲は、園においてはどれも大きな役割を担う楽曲であり、その活動の使用頻度はどの園においても非常に高い。

これらの重要な楽曲を、楽曲構成・和声学・演奏法の側面から分析することで、楽曲の特徴や共通点を見出し、保育者が楽器演奏をする上で、より技術習得をしやすい方法や手段を考察し、保育者の演奏技術上の手助けとなりえないかを考えてみたい。

## II 季節に関する楽曲の作曲学的観点による考察

### 1. 季節に関連する38の楽曲の和声分析

まず、上に挙げた38の楽曲の和声分析を行う。楽曲を支配する和声構成を分析することは、その楽曲の内容を把握する上で、非常に重要な作業である。保育園や幼稚園で使用される童謡や唱歌、子供に親しみやすい楽曲は、比較的易しく、単純で、さらに反復の多い和声構成を持つものが多い。この和声構成上の単純さを利用し、ここでは、多数の楽曲を1曲ずつ楽譜から習得するのではなく、先に単純な和声伴奏法を身につけ、多くの楽曲にそれを応用して対応する、という形式の学習法を

提案する。そうすることによって最小限の和声学的知識や演奏技術で、より多くの楽曲の伴奏を可能にさせたいという試みである。短時間で、効率の良い学習効果を得ることができ、保育者の楽曲のレパートリー数を格段に押し上げる可能性を持つ学習方法である。まずは、例に挙げた38の楽曲の和声構成を下のような項目に分け、詳細をみていく。

1. カデンツ（Ⅰ度 Ⅳ度 Ⅴ度）の和声で伴奏することができる
2. カデンツ（Ⅰ度 Ⅴ度）の和声で伴奏することができる
3. 基本的なカデンツ（Ⅰ度 Ⅳ度 Ⅴ度）の和声だけでは伴奏できない
4. 和声付伴奏を必要としない

（表4）＜伴奏部分の和声構成＞

	曲数
Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ度和声による伴奏	32
Ⅰ・Ⅴ度和声による伴奏	3
それ以外の和声を要する	2
和声付伴奏の必要なし	1

さらに、実際の楽曲における和声進行を各楽曲とも全曲（曲頭から終止線まで）を通して分析を行う。表記については、ローマ数字で和声度数を示し、区切り線は小節線を示すものとする。

#### 1. Ⅰ度・Ⅳ度・Ⅴ度の和声で伴奏可能な楽曲

『春よ来い』

I | I | V | V | I | IV | IV | I | IV | I | V | I | | I | I | V | I |

『はるがきた』

I | I | I | V | I | IV | IV | I |

『春の小川』

I | I | IV | I | I | I | I | IV | V | I | V | I | IV | I | I | I | IV | V | I |

『あめふり』

I | I | I | V | I | IV | V | I | IV | I | V | I | I |

『あめふりくまのこ』

I | I | IV | IV | V | V | I | I | I | IV | V | I |

『雨』

I | I | I | V | IV | I | I | V | I | I | IV | V | I | IV | I | V | I | IV | V | I |

『夏は来ぬ』

I | IV I | IV I | V I V | I | IV I | I V | I |

『うみ』(3拍子)

I | IV | I | V | I | I | V | I |

『われは海の子』

I | I | I | I | IV | I | V | I | V | I | IV | I | IV | I | V | I |

『とんぼのめがね』

I | V | I | IV I | IV | I | I | V | I | V | I |

『赤とんぼ』(3拍子)

I | I IV I | IV | I | I | IV I | I V | I |

『どんぐりころころ』

I | I V | I IV | I V | I | I V | I IV | V I |

『まつぼっくり』

I | I | I | V | I | I | V | I | IV | I | I | V | I | I | V | I |

『虫の声』

I IV | I | IV | I | I | V | I IV | I | IV | I | I | V | I | I | IV | I | IV | I | V | I |

『里の秋』

I | IV I | IV I | I | I | IV I | V | I | V | I | IV I | V | IV I | IV I | V | I |

『紅葉』

I | I | I V | I V | I | I | I V | V I | I | I | I | V | I | IV I | I V | I |

『雪』

I | I | I | I | I | I | I | V | I | I | I | I | IV | I | V | I |

『たき火』

I | I | I | V | I | IV | V | I | V | V | I | I | IV | I | V | I |

『お正月』

I V | I | V | I | IV I | I | I | V I | I V | I | V | I |

『豆まき』

I IV | I | I IV | I | I | I | V | V | I | IV | V | I |

『こいのぼり』(3拍子)

I | I | I | V | I | I | V | I | IV | I | V (I) | V | I | IV I | V | I |

『せいくらべ』(3拍子)

I | I | IV | I | IV | I | V | I | I | I | I | I | I | IV | V | I | V | I | I | V | I | IV  
| V | I |

『たなばたさま』

I | I | I | I | I | I | I | V | I | I | IV | IV | I | I | V | I |

『ジングルベル』

I | I | I | IV | IV | V | V | I | I | I | I | IV | IV | V | V | I V | I | I | I | I | IV |  
I | V | V | I | I | I | I | IV | I | V | I |

『あわてんぼうのサンタクロース』

I | IV I | I | V | I | IV | IV | IV | IV | I |

『おかあさん』

I | IV I | IV I | IV | V | IV | I | VI |

『おとうさん』

I | IV | IV | I | IV | V | I | I | V | I |

『うんどうかい』

I | I | IV I | V | I | I | IV | VI |

『くつがなる』

I | I | I | V | IV | IV I | IV I | IV | IV | I | IV | V | IV | I | V | I |

『やきいもグーチーパー』

I | I | I | V | V | V | V | I | I | I | I | IV | V | V | I | I |

『いもほりのうた』

I | VI | I | VI | IV | VI | VI |

『一年生になったら』

I | IV | I | IV | I | VI | I | IV I | IV | IV | I | VI |

## 2. I度・V度の和声で伴奏可能な楽曲

『どこかで春が』

I | I | I | V | I | I | V | I | I | IV | I | IV | I | I | V | I |

『うれしいひなまつり』

I | I | I | V | I | I | V | I | I | I | I | I | I | I | V | I |

『あくしゅでこんにちは』

I | I | V | V | IV | I |

## 3. I度・IV度・V度以外の和声が必要な楽曲

『まっかな秋』

IV | IV | I | V | IV | VI | V | V | I | I | I Ⅱ度調 (V | I) | Ⅱ V度調 V | V  
| I | IV | V | I |

『小さい秋みつけた』

I | I | I | V | I | I | IV | V | IV度調 V | IV | Ⅲ度調 V | Ⅲ | VI | I (第2転回形) | IVも  
しくはⅡ | V | I | I | I | VI |

## 4. 和声付き伴奏を必要としない

『おべんとうばこ』

分析のとおり、I度・IV度・V度のカデンツで伴奏演奏が可能である楽曲は32曲と非常に多い。それよりも和音が1種類少ないI度・V度の2種類のカデンツだけで伴奏可能な楽曲も3曲ある。全38曲のうちの35曲が、最大3種類の和声だけで伴奏ができるということになる。このことでわかるとおり、3種類の和声進行の習得は、多数の楽曲演奏を可能にする鍵となりそうである。

I度・IV度・V度以外の和声が必要である2曲(『まっかな秋』と『小さい秋みつけた』)は、いずれも曲の中で一時的な転調を必要とする。実際に園の活動の中で、『小さい秋みつけた』は、秋の楽曲としても使用頻度が比較的低い。頻繁な転調や複雑な和声交代が行われるため、他の楽曲と比較すると演奏の難易度が高く、保育者自身にも扱いにくいという印象を与えやすい。また、この曲が使用されにくい理由には、短調の楽曲であるという要素も大きいと考えられる。保育園や幼稚園では、長調の楽曲を扱うことが圧倒的に多い。これは、本来、唱歌や童謡、子供のために作曲された楽曲自体の多くが長調で表現されているという事実もあるが、園において、子供達の気持ちを明るく、楽しくさせるために、長調の音楽が有効であるという保育者側の判断や配慮があることも、その理由の1つになっているだろう。調性という視点で見ると、同様に『うれしいひなまつり』も短調である。しかし、重要な年中行事である「ひな祭り」(上巳の節句)の音楽の中で、一般的によく知られている楽曲はこの曲だけであり、古くから親しまれてきた楽曲であるために、この曲に関してはためらうことなくどの園でも使用されているようである。

『うれしいひなまつり』は、歌詞の内容においても、歌詞で使われる日本語の使い方においても、非常に洗練されており、同時に子供達にも伝わりやすい。旋律の動きも、覚えやすいが、旋律の起伏が音楽の緩急を生み出して、感情豊かにしあがっている。長い年月愛され親しまれてきて、また今後もそうであり続けるに値する、完成度の高い楽曲である。

## 2. 和声分析を基にした伴奏譜例

それでは実際に、35曲の基本的な和声構成をもつ楽曲の伴奏例を譜面で示し、伴奏音としてどのような音を選択すればよいのかを記す。ここでは、基本調としてCdurで表記するが、短調の場合でも、同様の和声進行で考えて良い。リズムや音価、拍子に関係なく、表記は全て全音符とする。また、旋律は右手で演奏すると仮定し、ここではあくまでも左手伴奏として述べていく。

### < I度・V度和声 >

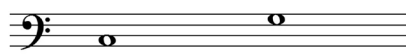
調性音楽においては、調性決定と調性の安定を感じさせるトニックに属するI度(主和音)と、主和音を引き立て音楽に変化と動きを与えるドミナントに属するV度の2和音は最も重要であり、旋律に伴奏として加えることで、調性を明確にし、旋律だけの演奏よりも、聴く者により楽曲の雰囲気や調子を明確に感じさせることができる。響きとして固さはあるが、非常に明快であるため、わかりやすく、子供の音楽には適当であるケースが多い。

#### 単音による伴奏

##### 伴奏例

I度とV度の根音のみをバス(ベース)として奏する形。I度の根音とV度の根音は、その楽曲の調の主音と属音であり、調性感を決定的に表現する基礎となる2音である。運指としても、手の両端にある1と5の指のみを動かすことは非常に単純で習得しやすい。この形から基礎練習に入ると、初心者・入門レベルであっても、音楽のもつ和音感覚を十分感じながら身につけることができる。非常に簡単だが、全ての基礎であり、また子供達でも打楽器的な扱いで演奏することができる。

運指 C音=5 G音=1



C: I V

#### 2音重音による伴奏

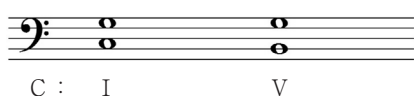
##### 伴奏例

単音の伴奏体からI度の和声構成音第5音と、



V度の和声構成音第3音（導音）を加えた形。V度の和音においては、その楽曲の調の導音が加わることで、響きが深まり、音楽的にも表情が豊かになってくる印象がある。導音は、安定感のある主音が揺れ動き、音楽に変化を与えたあとで、もう一度主音という安定したポジションに和声に戻そうと期待させる音である。その意味においても、導音が含まれることで、和音の響きは充実感を増し、トニックとドミナントの個性をさらに引き出す効果がある。

運指 CG音 = 5・1 HG音 = 5・1

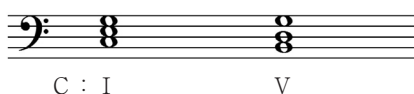


### 3音重音による伴奏

#### 伴奏例①

2音重音による伴奏体からさらに1音を加えた形。3音重音にすることで、ここで初めて「三和音」が成立する。運指においては、5本の指のうち3本を使用することから、不慣れな初心者や入門者であると、鍵盤を押したり、手や指を動かしたりすることに不自由さを感じることもあるかもしれないが、音楽的には、少なくとも三和音までは、伴奏体として操ることができるよう目指し、和声音楽の基礎の形を完成させたい。

運指 CEG音 = 5・3・1 HDG音 = 5・3・1

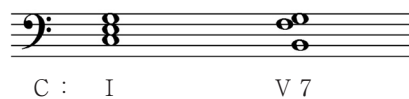


#### 伴奏例②

三和音による伴奏からV度の和音を少し変化させたもの。V度を三和音の設定から、属七の和音に変え、その第5音を省略する。実質3音で演奏する和音。属七の和音の第7音が聞こえるため、伴奏例①の和音よりも、さらに音の響きが深まり、響きの複雑さも感じさせる。5と2の指を大きく開いて演奏するため、開くことに慣れていないと弾きにくく感じることもあるが、V度系和音では、

最も使用頻度が高いだろう。

運指 CEG音 = 5・3・1 HFG音 = 5・2・1



#### 伴奏例③

V度の部分を三和音でなく、属七の和音を用いるのは伴奏例②と同様であるが、第3音（導音）を省略する形。伴奏例②の和音の響きよりふっと軽くなったような響きの特長がある。調性感を表現するのに必要不可欠であり、また主音を導くという役割から、非常に印象的に耳にはいる導音が省かれることで、響き全体が軽くなり、曖昧さもでてくる。運指上、指や手の開きが少なくなることから、伴奏例②よりも弾きやすく感じる場合もある。

運指 CEG音 = 5・3・1 DFG音 = 4・2・1



### < I度・IV度・V度和声 >

季節に関連する楽曲として例に挙げた38曲のうち、32曲がこの3種類の和声のみで伴奏を行うことができる、という分析結果を出すことができた。そのことより、この項目の伴奏譜例は、実際に多くの楽曲に対応させることができ、非常に有効に活用できるものと考えられる。これまでに挙げたI度とV度の和声に、IV度加わるだけであり、大きな違いは生じない。I度は和音の種類としてはトニック、V度はドミナントに属する。それに対し、その2つのつなぎ役のような柔らかい存在感を放つのが、サブドミナントであり、IV度はそれに属する。トニックとドミナントの交替だけで音楽が進行する時よりも、格段に流れが滑らかになり、旋律線も動きやすくなる。曲の緩急や表情もさらに充実してくる。サブドミナントに属するIV度を伴奏体として演奏することで、トニック、ドミナント、サブドミナントという、和声

構造の全ての機能を使用することになる。

**単音による伴奏**

伴奏例

I度とV度の単音による伴奏と同様、これも子供達が打楽器的な扱いで演奏することができる。3種類の和音構成に増えたが、単音による伴奏であれば、演奏技術としては大きな負担とはならない。これまでのI度を示す根音のC音と、V度を示す根音のG音に、新たにIV度を示す同じくIV度和音の根音であるF音が加わる。運指は、2の指とするので、初心者や入門者でも、鍵盤を押しにくく感じるような不自由さはないと思われる。

運指 I度→C音=5 IV度→F音=2  
V度→G音=1



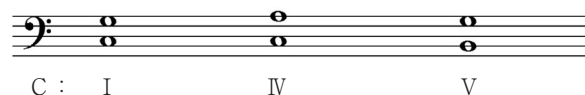
**2音重音による伴奏**

伴奏例

単音の伴奏からまた音数を増やす。3つの和声進行においては、それぞれ共通音をもつため、伴奏体は、原則的に共通音保続の形をとる。演奏上はまず、和音進行の際、その共通音部分の指を「動かさない」ことを心がけ、固定した共通音の指ともう片方の動かす指への意識が混同しないよう、運指に慣れていかなければならない。用いる指は、全て5と1の指であるため、習得の際には、数回の練習で運指に慣れれば、困難を要するものではない。ここでは、IV度和音のF音（根音）は省略した形とする。IV度和音で演奏する2音の、A音は第3音、C音は第5音である。根音省略だと和音の持つ響きの特長が弱まりそうな印象があるが、残りの2和音がトニック、ドミナントの最も重要で印象的な和音であるため、根音省略のIV度和音の印象が若干和らぎ軽い響きになることは、音楽全体の表情や、響きの緩急という視点から見ると、かえって効果的であるとも言える。根音省略のIV度から、柔らかさを持つサブドミナント和音の響きの特長を感じることも、和音学習におい

て重要なことである。

運指 I度→CG音=5・1  
IV度→CA音=5・1  
V度→HG音=5・1



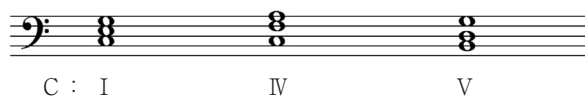
**3音重音による伴奏**

三和音による3種類の和音を楽曲の中で駆使する形が登場する。この伴奏の形が、最も一般的に楽曲の中で使用されると思われるが、そこにたどり着くまでに、これまでに挙げてきた単音による伴奏、2音重音による伴奏、と順に練習してくと、それぞれの響きの特長が把握でき、自分自身の好みや、それぞれの楽曲の曲調に合った伴奏例を選択することもできるであろう。ピアノ伴奏技術としては、最も基本的な段階にあるが、保育園や幼稚園で用いる音楽においては、この伴奏体を習得するだけで7～8割の音楽活動に対応できると思われる。

伴奏例①

三和音による伴奏は、根音・第3音・第5音という三和音の基本的な形の音を選択し、伴奏体にする。ただ、演奏する際には、各和音の共通音は保続させるため、常に和音の基本形（根音がバス音となる）で演奏するわけではない。2音重音の際と同様、共通音保続の形で演奏することで、和音進行をなめらかにする。和音の種類が増え、指を移行させる動きも増えてくるに従い、初心者には、運指が難しく感じることもあるかもしれない。

運指 I度→CEG音=5・3・1  
IV度→CFA音=5・2・1  
V度→HDG音=5・3・1

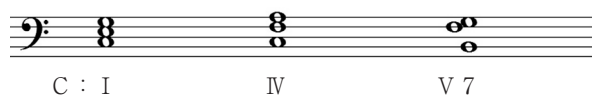


伴奏例②

V度和音において、三和音からさらに発展した

「属七の和音」を用いる。I 度、IV 度の和音については、伴奏例①と全く同じであり、V 度和音のみ V 7 の第 7 音である F 音が加わり、その代わりに第 5 音である D 音を省略するため、演奏する際の音数は、3 音構成と変わらない。響きとしては、三和音よりさらに 3 度上の第 7 音が加わるため、三和音の固さから、広がるような充実した柔らかなものに変化する。そこにサブドミナントの IV 度和音が加わることで、響きの柔らかさがさらに増す。

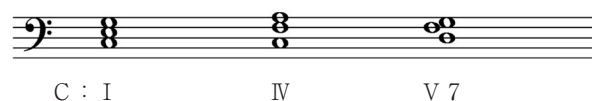
運指 I 度→CEG 音 = 5・3・1  
 IV 度→CFA 音 = 5・2・1  
 V 度→HFG 音 = 5・2・1



#### 伴奏例③

これも I 度、IV 度においては、伴奏例①②と同様である。V 度和音においては、V 7 の和音の第 3 音（導音）を省略した形で演奏する。主音と導音の交替が、I 度と V 度の和音交替の中で最も印象的な響きをもつが、あえてその重要な導音を省略することで、V 度和音の強い個性があいまいになり、柔らかく軽い響きとなる。旋律部分に導音が響いている場合、導音を伴奏体で省略することは非常に有効である。印象の強い導音の響きが旋律と伴奏体でぶつかってしまい、響きが固くなりすぎることを防ぐことができる。運指においては、5 の指を大きく広げなくてもよいため、伴奏例①や②に比べて弾きやすいと感じられるかもしれない。

運指 I 度→CEG 音 = 5・3・1  
 IV 度→CFA 音 = 5・2・1  
 V 度→DFG 音 = 4・2・1



### 3. 楽曲の拍子に関する分析

上に述べた和声伴奏をどのようなリズムで演奏すればよいかは、楽曲の拍子によって変わってくる。ここでは、例に挙げた 38 曲を大きく 2・4 拍子系と 3 拍子系とにわけると、8 分の 6 拍子といった複合拍子はここでは例として挙がっていない。

(表 5) <拍子>

	曲数
2・4 拍子系	34
3 拍子系	4

3 拍子の楽曲が圧倒的に少ない日本の音楽の長が、表 5 の数字からも見て取れる。農耕作業のリズムとされる 2, 4 拍子は、日本人の中に染み付いたリズムであり、そのため、日本人によって作曲される曲は、2, 4 拍子系の楽曲が多いといわれている。実際に、園で使用される季節に関する楽曲の多くは、童謡や唱歌であり、日本人作曲家によって作曲された楽曲が多く使用されているということである。

伴奏を行う際、基本的な伴奏リズム体としては、次の 4 つが考えられる。

1. 和音のみ
2. 和音連打型
3. 分散和音型
4. アルペジオ型

1 の「和音のみ」という形は、基本的に 1 小節に 1 和音、もしくは次の和音変化が起きるまで、小節開始拍（第 1 拍目）においてのみ和音を打つ形である。それに対し、2 の「和音連打」は 1 拍ずつ和音を打つ形とする。

### 4. 楽曲の調性に関する分析

次に楽曲の調性について述べる。楽曲の調性については、大きく短調と長調で分類する。分類の様子は表 6 の通りである。

(表6) &lt;調性&gt;

	曲数	調性の内訳
短調	2	cmoll emoll (『うれしいひなまつり』と『小さい秋みつけた』)
長調	36	Cdur Ddur Esdur Fdur Gdur Asdur Adur Bdur

#### IV 楽曲の移調演奏の利点と方法

##### 1. 移調による4つの基本調での応用

季節に関する楽曲38曲のうち、36曲が長調であったが、その多くがCdur、Ddur、Fdur、Gdurで原曲が記譜されている。この4調による楽曲は、36曲の長調楽曲のうち30曲にのぼる。ここでは、これらの調を「基本4調」とよぶ。また移調に際しても、この4つの調での演奏を可能にしておけば、臨機応変に素早い対応ができると思われる。

一般的に楽曲の移調を行う場合、様々な理由が存在する。演奏する楽曲の調性が、使用する楽器の音域や特性に合致していない場合は編曲や移調が必要であるし、歌の場合には、歌手と楽曲との音域を調整する手段として移調は有効である。

ここでは、園の活動内容に合致させ、かつ保育者の扱いやすい調性で演奏する、ということを前提に、「歌いにくさの回避」と「保育者が扱いやすい基本4調での調性の整理」という2つの具体的な目的から移調を考えてみたい。これまでに挙げた38の楽曲例を、基本4調を軸にみながら、移調の可能性や必要性を考察していく。

##### 2. 移調による「歌いにくさの回避」

原曲どおりに伴奏演奏する場合は、楽譜に書かれたものをそのまま演奏すれば良い。しかし、子供達と歌う際に、楽曲のキーが子供達に合っていないように感じる、また指導者にとって非常に不安定な音域であり、歌いにくい、などの様々な理由によって、臨機応変に移調しなくてはならない事態が発生する可能性もある。このような場合、楽譜上で、楽曲の旋律部分を見て、「旋律の最高

音」を調べることで、移調の必要性和移調の度合いを把握することができる。参考までに、これまでに例に挙げてきた楽曲38曲の旋律の最高音を調べてみる。すると、下のような結果を見ることができた。

(表7) 旋律の最高音

2点C音	7曲
2点Cis音	1曲
2点D音	22曲
2点Es音	3曲
2点E音	4曲
音程なし	1曲 (『おべんとうぼこ』)

このように童謡など、子供のための音楽のほとんどが、2点のC音からE音までの長三度間に旋律の最高音が存在することがわかる。作曲家達は、多くの人にとって歌いやすい音域を使用したと考えられ、また、彼らは、その高音音域部分が、2点C音からE音である、と判断してきたのだと思われる。しかし、この音域は実際には高すぎるように感じられる。上の表7によると、旋律最高音が2点Es音、E音である楽曲は7曲ある。E音最高音の楽曲は、『せいくらべ』『雨』『春が来た』『夏は来ぬ』の4曲、Es音最高音の楽曲は『赤とんぼ』『われは海の子』『どこかで春が』の3曲である。これらの楽曲は、いずれも、旋律の音域が広く、旋律線に大きな起伏がある、という特長を持つ。最高音も高音であるが、最低音も(点なし)B音、1点C音と低く、短い楽曲の中で旋律線がうねるように動く。旋律が急激に上下行する動き、伸びやかな線を描く旋律線、長い音価の歌い上げるような旋律のリズムなどを見てみると、これらは、子供のための音楽というよりも、歌曲のような旋律スタイルで作曲されている印象が強い。そのため、実際に「子供が歌い親しむ」という意味では難しい楽曲ともなりえる。この場合、移調して最高音を下げることによって、起伏の激しい旋律線の中での、厳しい高音歌唱を避けることができる。しかし、ここで注意したいことは、最低音も非常に低い場合、3度、4度という移調で調を下げると、最高音は歌いやすくなる

が、最低音まで声が出ないという問題が起きうる、ということだ。Es 音最高音の3つの楽曲の場合、半音（短2度）下げる移調が精一杯だと思われる。そして、最高音はD音となる。わずかD音とEs音という半音の差ではあるが、この高音域での半音は、声の出し方としては非常に大きな差となり、かなり歌いやすく感じる。最低音も（点なし）A音と、低音になるが、話し言葉の延長のような声の出し方で歌うことによって、大きな問題ではなくなるだろう。

### 3. 基本4調による調性の整理

ここでは、あくまでも基本4調にこだわりたい。この4調は、園で使用する楽曲の多くを占め、これらのカデンツを習得することで、多数の楽曲演奏を可能とする。長調楽曲36曲中のうち30曲がこの基本4調に属することは分析で明確になったが、移調することで、さらにこの基本4調に属する楽曲は増えそうだ。前に述べたEs音最高音を持つ3曲を、半音下げて移調した場合の調性をみてみる。

(表8)

	原曲	半音下に移調したときの調
『赤とんぼ』	Esdur	Ddur
『われは海の子』	Esdur	Ddur
『どこかで春が』	Asdur	Gdur

半音下げた移調を行うと、DdurとGdurと、前に述べた基本4調に含まれることとなる。Es音最高音を半音下げる移調を行うことで、これまでに挙げた36曲の長調楽曲のうち、33曲がCdur、Ddur、Fdur、Gdurで演奏することができることとなる。一方、E音最高音をもつ4曲は、調性がCdurとDdurである。一時的な高音歌唱の負担を移調によって回避することよりも、調性が基本4調から離れてしまい、演奏を複雑にしまうことのほうを避けたい。これらのことより、この基本4調のカデンツを習得することで、保育者は、保育園や幼稚園での季節に関わる音楽活動のほとんどをこなすことができることがいえ、楽

器練習の負担も非常に減るだろう。

これまでの考察の結果、「上記の和音伴奏譜例を、楽曲の拍子に従い、例に挙げたいずれかのリズムの伴奏体にあてはめて、長調においては基本4調で演奏する」という狭い条件の範囲内で、季節に関する代表的な38曲のうち、35曲が演奏可能となる。（うち1曲は音程をもたない楽曲である。）これは、楽器に対する少ない技術や知識でも、多数の楽曲を扱うことのできる方法として、保育者にとって非常に役に立つものであると考えられる。この伴奏体は、基本的には右手で旋律を演奏している中で、左手によって担当させるものとして述べてきたが、旋律部分を歌唱によって表現すれば、ピアノ演奏は左手片手の伴奏体演奏のみとなり、さらに保育者には扱いやすくなる。そして、園での活動における楽曲表現としては、それでも十分でないか、と感じる。また、右手の旋律演奏に不安があったり、習得に時間を要したりする場合も、右手旋律の習得までの間、左手伴奏のみを演奏し、園での活動に活かすことができる。習得途中という過程においても、実践の場で十分に活かせる、という伴奏体を身につけることは、保育者にとって安心材料ともなりうる。

## V 季節を題材とした音楽の新たな実習例

### 1. 伴奏法の応用

これまでに述べた伴奏譜例は、いずれも単音伴奏から最大でも三和音による伴奏と、伴奏音は非常に少なく、和音種類も、最高3種類（I度、IV度、V度）と少ない。この単純な形体を利用し、伴奏を、保育者によるピアノ演奏に限らず、子供達に担当してもらうことも考えられる。Cdurの楽曲の単音伴奏を例にすると、I度、V度のカデンツによる楽曲は、C音とG音を1音ずつ、園児2名に担当してもらう。I度、IV度、V度のカデンツによる楽曲の場合は、C音、F音、G音を1音ずつ、園児3名に担当してもらう。園児は、保育者が使用しているピアノやオルガンを使っても良いし、園児自身のメロディオン、ハーモニカ

といった音程表現のできる楽器を使っても良いだろう。ハンドベルなども有効に使える楽器である。また、さらに、瓶やグラスなどに水を入れ、C音、F音、G音といった音程を自分たちで作成し、楽器として鳴らすこともできる。簡単な伴奏を、子供達にも体験させることで、表現の喜びを伝えることができるだろう。これは、単音伴奏からさらに応用していくこともできる。三和音のカデンツ程度の伴奏を、1人1音を鳴らす、といった分担で

複数の園児に担当させ、より複雑な伴奏体で表現することも可能である。次第に表現の喜びから、共同作業の楽しさや喜びを知ることとなり、さらに分担して完成させることから、個々が責任を持つ、という心情まで子供達の心を導く可能性もある。シンプルな素材であるからこそ、工夫次第では、大きな展開や効果を引き出せるのではないかと思われる。この内容についての実習指導案を示す。

(資料1) 実習指導案1

題 材	あくしゅでこんにちは	5～6歳	
ねらい内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌いながら、音楽に合わせてあいさつの動作を行い、あいさつの心や、大切さを学ぶ。</li> <li>・音楽の伴奏を友達と交代しながら担当し、みんなで作り上げる音楽の楽しさを感じる。</li> <li>・実際に音程のある楽器を手作りすることで、音に対する敏感な感性を養う。</li> </ul>		
幼児の活動	指 導 内 容		留 意 点
●先生や友達と触れ合う 挨拶の歌をみんなで一緒に歌う	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「最初にしっかりとご挨拶をしましょう」 先生や友達と「こんにちは」の挨拶をする。</li> <li>・「ご挨拶の歌をうたってみましょう」 『あくしゅでこんにちは』を全員でうたう。</li> <li>・「次は、挨拶の動きをうたいながらやりましょう」 歌に動作を加える。二人一組になって、歌詞の「あくしゅ」の場面ではあくしゅを交わし、「こんにちは」「さようなら」の場面で頭を下げる挨拶をする。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌いながらピアノ伴奏を先生が行う。</li> <li>・大きな声で、挨拶の部分の歌詞をきちんと表現できるように指導する。</li> </ul>
●音楽を楽器で奏でる 「ド」「ソ」の音を音楽に合わせて鳴らす。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「楽器の音をおぼえましょう」 二分音符のリズムで、「ドドドドソソソソソドド」の音列を覚えて、うたう。</li> <li>・「楽器で音を鳴らしましょう」 今できている二人一組で、「ド」の音の担当と「ソ」の音の担当を決める。鍵盤楽器を使い、二人でそれぞれのパートの音を演奏する。</li> <li>・「歌に合わせて、伴奏も入れましょう」 伴奏者の一組を決め、全員による『あくしゅでこんにちは』の歌（動作も含める）に伴奏を加える。伴奏者の組を交代させ、何回か繰り返す。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ド」を4回、「ソ」を6回、さらに「ド」2回で終止という形を覚える。</li> <li>・覚えた音列とリズムを奏する際は、指一本（右手の人差し指など）で奏するように指導する。</li> <li>・歌と単音の伴奏体が融合するように、しっかりと音楽を合わせる。</li> </ul>
●楽器を作る 「ド」「ソ」の音程の楽器を作る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「楽器を作ってみましょう」 強固なガラスのコップなどの瓶を各自用意し、各瓶に、ド音の担当の子供は「ド」を、ソ音の担当の子供は「ソ」の音程に近くなるまで水を入れる。軽い箸などで瓶の上部枠部分をたたき、音程を確かめる。</li> <li>・「音楽に合わせて楽器を鳴らしましょう」 二人一組で、『あくしゅでこんにちは』に合わせ、上ですでに実施した「ド」と「ソ」の音によるリズム打ちの演奏をする。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ガラスの素材は危険が生じるため、取り扱いに注意する。プリンなどのガラス容器などが望ましい。水や箸の取り扱いや、人に向けることの危険性も考慮して指導する。</li> <li>・子供達自身が作り上げた手作りの音楽であることを教え、自信や喜びを感じてもらおう。</li> </ul>

## 2. 創作音楽による応用

上のような伴奏体を習得すると、多くの楽曲を伴奏演奏できるだけでなく、自分自身でも音楽を創作し、幼児教育や保育の現場で活かすことができる。下に、その創作楽曲例と実習指導案を示す。ここでは、これまでに述べてきた季節に関する内容や基本4調による伴奏法を応用した創作楽

曲とする。楽曲は、決まった旋律やリズムを持つが、子供達とコミュニケーションを取りながら、即興的にどんどん変化させられるようなものとした。歌詞は、決まっているものを設定するが、質問形態の歌詞から始まるため、子供達が、自分の気持ちに即した言葉を質問に答える形で歌詞にして、旋律にのせて歌うことができる形態である。

(図1) 譜例『春になれば』

Piano

はる なつ あき ふゆ はる なつ あき ふゆ よつ つ の

Pno.

き せ つ は る に な れ ば な に が み える

Fine

Pno.

さ く-ら (さ く-ら) つ-くし (つ-くし) もん しろちょう

Pno.

(もん しろちょう) たん ぼ ぼ (たん ぼ ぼ)

D.C. al Fine

- 上記歌詞の四角で囲った部分(□)は、歌詞の変更が可能な部分とする。  
例：「はる」=なつ、あき、ふゆ。「みえる」=きこえる、におう、など。
- 3段目、4段目の歌詞は、すべて変更可能である。  
3、4段目の歌詞の例  
春=チューリップ・かえる・うぐいす・入園式など  
夏=きんぎょすくい・すいか・ゆかた・はなびなど  
秋=やきいも・どんぐり・うんどうかい・こうようなど  
冬=ておくろ・ゆき・こたつ・ストーブなど

(資料2) 実習指導案2

題 材	春になれば	4歳～6歳	
ね ら い 内 容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・季節について話をしたり、歌を歌ったりして、温かい心を育み、日本の文化に触れる。</li> <li>・質問と応答の形式の音楽を学び、質問に合わせて、自分の考えを音楽の旋律にのせて歌で表現することで、自由に気持ちを表現する喜びを感じる。</li> </ul>		
幼児の活動	指 導 内 容	留 意 点	
<p>●歌唱 『はるなつあきふゆのうた』をうたう。</p> <p>●創造的活動で自由な表現をする 自分の気持ちや意見を自由に歌詞にする</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「季節のことを知っていますか？」 季節にはどんなものがあるか、それを知っているかを問いかけながら、春夏秋冬の話をする。また、各人の好きな季節やその理由についても尋ねてみる。</li> <li>・「季節の歌をうたいましょう」 『はるなつあきふゆのうた』という質問と応答の形式の楽曲を紹介し、みんなで歌ってみる。</li> <li>・「先生に続いてうたいましょう」 「春になれば何が見える？」という質問部分の歌詞を全員で歌う。応答部分の歌詞では、「さくら」「つくし」など2回ずつ歌詞を反復するため、1回目の歌詞を先生が歌い、先生の「ハイ！」の掛け声をきっかけに2回目の歌詞を子供達に歌ってもらう。(夏秋冬についても同様に行う)</li> <li>・「みんなで歌を作りましょう」 1. 「春になれば何が見える？」の質問部分の歌詞に続く応答部分を子供達に自由に考えてもらい、旋律にのせて歌ってもらう。(夏秋冬についても同様)</li> <li>2. 「春になれば何が見える？」の「見える」の部分の歌詞を「聞こえる?」「におう?」「したい?」などのように、質問部分の歌詞を変え、応答部分を子供達に自由に考えてもらい、歌ってもらう。(夏秋冬についても同様)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・質問と応答の部分の抑揚をはっきりとつけて歌う。</li> <li>・歌詞の内容や意味が伝わりやすくなるため、先生が意識して、語りかかるように歌う。「ハイ！」の掛け声をいれる場合は、子供達の歌声をしっかりと引き出せるようなタイミングで行う。</li> <li>・なるべく多くの子供達の意見や気持ちを反映させるために、指名をするなどの工夫をする。</li> <li>・応答部分の反復の歌詞は、1回目を指名した子供に、2回目は全員でそれを繰り返すなどの形で歌ってもらう。</li> <li>・楽曲の長さ(サイズ)を臨機応変に変更することができる。3、4段目は子供達の意見による歌詞が出揃うまで反復させてよい。意見が出揃ったところで曲頭に戻り、Fine 記号で楽曲を終止させる。</li> </ul>	

まとめ

「季節」や「年中行事」は、日本人の私達にとって、ごく自然なものであるため、改めて注意深く意識を向けるという機会はありません。しかし、本来それは、日本独自の伝統や文化を背景に持つ重要なものであり、園での実践は非常に意義深いものである。

実際に、欧米各国には存在しない「季節の節目」や「季節」自体に敬意を払う行事などについて述べてきたが、それらの内容を表現した音楽も、欧米に比べ、日本には圧倒的に多い。これは、子供向けの音楽だけでなく、古典音楽や伝統音楽を含め、総合的に言える現象である。欧米には、自

然の風景や動物を音楽で表現する慣習はあり、古典音楽の中でも、多くの作曲家達が、題材としてとりあげている。しかし、夏を感じさせる蝉の声や、秋を知らせるこおろぎや鈴虫の音を題材とした音楽が多数作曲されている日本に対し、季節自体を音楽で表現したり、季節を感じさせる虫の音を音楽で表現したりする例は、欧米の音楽には少なく、その長い音楽史の中でも、非常に稀である。私達は、このように、独自の感性や文化が日常生活に存在することを、まずは「知る」ということが重要である。そして、それに対して誇りを持つことも重要であろう。それと同時に、外国から入ってきた行事についても、軽視してはならない。

日本では、クリスマス、ハロウィン、バレンタイン、イースターといった西洋社会の慣習、宗教



が基礎となった行事が、季節のイベントとして商業ベースに安易に取り入れられており、保育や教育の現場でも入り込んでいる。しかし、一体それらの行事は何なのか、日本の子供達の多くは知らずにいるのが現状であろう。「自分や周囲が何を行っているのかはよく知らない。知らないがやっている。」という状況は、残念なことに日本人の行動の特徴である。簡単にそれらの情報を得ることができるはずであるにもかかわらず、教わっていない、調べたことがない、というのが子供達の現状であろう。また、大人たち自身も同様である。教育や保育の現場にいる者は、次世代を担う子供達への思想や思考回路に、物事の起源や意味、文化というものをしっかりと知る大切さを植え付ける努力は惜しんではならないし、そのように子供達と接することで、「慣習」「宗教観」「伝統」「時間」「自然への敬意」「愛着」「知性」「感性」などが総合して、子供達の中に奥深くまで浸透していくであろう。そして、その伝達のために必要不可欠であり、非常に有効である「音楽」というツールを存分に活用し、表面的に音楽の内容を指導し、表現するだけにとどまらず、そのさらに奥に潜む「文化」という大きな意義にたどりつくことができれば、音楽は本来持つその素晴らしい存在意義を、私達に感じさせてくれるに違いない。

#### 参考文献

- 1 中島紀子・横松友義編著『保育指導法の研究』ミネルヴァ書房 2007.3.20 第4章1～4
- 2 小田豊・神長美津子編『新たな幼稚園教育の展開 幼児教育の充実に向けて』東洋館出版 2007.7 第1部、第2部
- 3 有馬幼稚園・小学校 執筆・監修 秋田喜代美『幼少連携のカリキュラムづくりと実践事例』小学館 2002.3.20 全般参考
- 4 無藤隆著『幼児教育の原則 保育内容を徹底的に考える』ミネルヴァ書房 2009.10.20 第4、5章
- 5 浜野政雄監修『音楽教育の研究（理論と実践の統一をめざして）』音楽之友社 1999.9 第1章
- 6 上田信道『名作童謡ふしぎ物語』創元社 2005.1.20 全般参考
- 7 石桁真礼生・末吉保雄・丸田昭三・飯田隆・金光威和雄・飯沼信義『楽典 理論と実習』音楽之友社 1997.1.20 第6章「和音」
- 8 『ピアノ伴奏 子どもの歌名曲選』ドレミ楽譜出版社 2005.3.20 pp50-80（譜面参照）
- 9 伊藤玲子編『日本童謡選集』ドレミ楽譜出版社 2004.6.30 pp6-119（譜面参照）
- 10 全日本リトミック音楽教育研究会編、板野平・溝上日出夫監修『ダルクローズ・システムによるリトミック指導1（3才児用）』全音楽譜出版社 1983年 pp2-4「まえがき」
- 11 全日本リトミック音楽教育研究会編、板野平・溝上日出夫監修『ダルクローズ・システムによるリトミック指導2（4才児用）』全音楽譜出版社 1983年 p52, p63, p87
- 12 全日本リトミック音楽教育研究会編、板野平・溝上日出夫監修『ダルクローズ・システムによるリトミック指導3（5才児用）』全音楽譜出版社 1983年 pp2-4「リトミック指導の展開」
- 13 相澤保正・伊藤嘉子・木村博子・児玉裕子・澤田直子・田中常雄・松原靖子・吉野幸男『幼児音楽教育の基礎 あたらしい音楽表現』音楽之友社 2005.1.31 p28, p32, p38, p42, p56, p76（譜面参照）
- 14 真鍋理一郎 訳・編・著『イタリアの旅 古い民謡と地方料理をたずねて』全音楽譜出版社 1988.9.15 全般参考

（東萌保育専門学校非常勤講師 肝付文子）